

に気づかずいつまでも同じような接し方をしていたら、子どもの発達に応じていないことになってしまふ。何より目の前の子どもの姿をよくみて、理解することが大切なのではないだろうか。

#### 〔文献〕

- (1) 根ヶ山光一「子育てと子別れ」根ヶ山光一・鈴木晶夫編『子別れの心理学』福村出版、一九九五
- (2) 鯨岡峻「保育を支える発達心理学」ミネルヴァ書房、二〇〇一
- (3) 菅野幸恵「母親が子どもをイヤになること…育児における不快感情とそれに対する説明づけ」『発達心理学研究』二〇〇一
- (4) 菅野幸恵・岡本依子「子どもに対する母親の否定的感情と母親になるプロセス」『家庭教育研究所紀要』二〇〇〇
- (5) 氏家達夫「自己主張の発達と母親の態度」二宮克美・繁多進編『たくましい社会性を育てる』有斐閣、一九九五
- (6) 南博文「子どもたちの生活世界の変容―生活と学校のあいだ」無藤隆ら(編)『講座生涯発達心理学 三 子供時代を生きる』金子書房、一―二六、一九九五
- (7) ベネッセ教育研究所『子育て基本調査報告書Ⅱ』一九九九
- (8) 村瀬孝雄「自己の心理学二 アイデンティティ論考」誠信書房、一九九五
- (9) 落合正行・佐藤有耕「親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析」『教育心理学研究』四十 四巻、一九九六
- (10) NHK放送文化研究所編『NHK中学生・高校生の生活と意識調査』NHK出版、二〇〇三

## 子育てが不安になる時代背景

### 子どものいる家族が少数派に

いま、日本の家族は、誰もが経験したことのない条件のもとにある。とくに子どもとその親が置かれた状況は特異である。それを象徴するのが図1(次頁)。世帯数が昭和二八年の一七・八万世帯から平成一四年の四六〇万五〇〇世帯へと増加したのに反し、平均世帯人員は五人から二・七四人へと減少。平均世帯人員が三人以下ということは、子どものいる家族が少数派になったことを示唆している。

そこで図2(三七頁)をみてほしい。昭和五〇年には

静岡大学教授  
**馬居政幸**

一人、二人、三人以上合わせて五三%、半数以上の世帯に子どもがいた。だが平成一四年には二七・八%とまさに半減。少数派どころか四分の一になった。他方、子ども数も一人が二〇・〇%から一一・八%、二人が二四・六%から一一・九%、三人以上が八・四%から四・一%と同じ割合で減少している。この数値は平成元年の一・五七ショックから昨年の一・三二へと下がり続ける合計特殊出生率(一人の女性が生涯に産む子ども数の平均値)とともに危惧される「少子化」の実態を示している。それは家族の中の子どもではなく、子どものいる家族自体が減少することである。このことは、子どもとその親、

子育てが不安になる時代背景

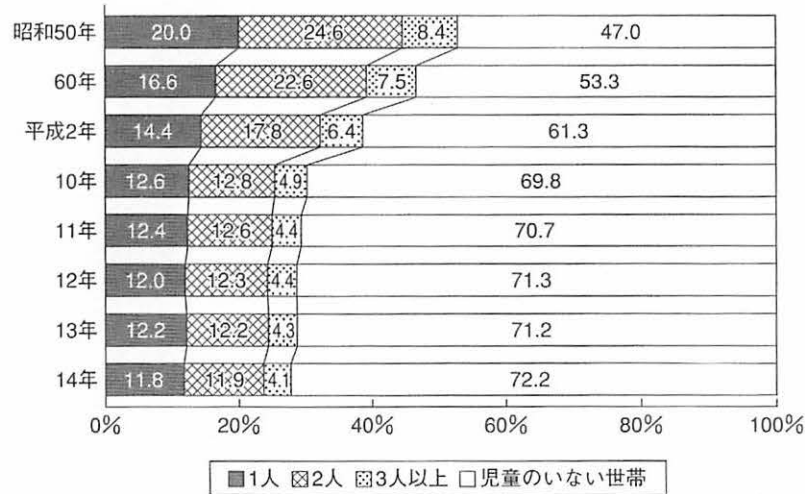


図2 児童有(児童数)無別にみた世帯数の構成割合の年次推移  
厚生労働省「平成14年国民生活基礎調査の概況」より

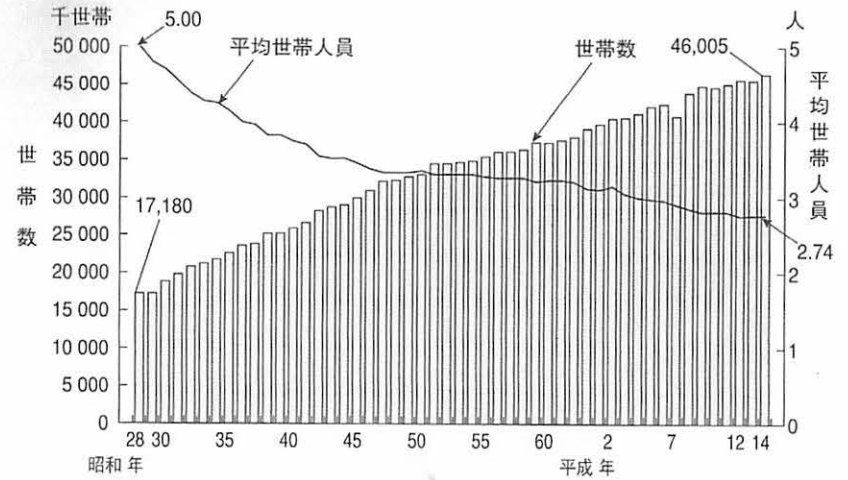


図1 世帯数と平均世帯人員の年次推移  
厚生労働省「平成14年国民生活基礎調査の概況」より

頁)から、結婚をして子どもを持った三〇代前半の四割近くが仕事をしていることがわかる。また、先の図4は三〇代前半の四人に一人は未婚で働いていることを示す。あわせれば子どもの有無にかかわらず同世代の多数派は仕事、すなわち子育て以外の世界を持っている。三〇代後半からは、子どもがいても仕事をしている母親が多数派である。三〇代の女性にとって親になることは多数派でも、親專業になることは少数派。三〇代で母親になるストレスは二〇代よりも高いはず。おまけに、家事育児專業の道を選んだ女性に苦楽を共有できる仲間が少ない。他方、仕事を持ちながら子育てをする女性は、それゆえの問題が重なる。すなわち、育児のために仕事につかない女性が少数派になる条件のもとでは、育児に専心する母親像を前提にした子育ての強調は、そのこと自体が二重に問題を増幅する。

その一つは、両親ともに就労する家族を前提にしない限り、今を生きる親と子どもの多数派の実態から離れたものとならざるをえないこと。もう一つは、少数派となった親專業の女性には、それが旧来の常識から判断して正しいものであればあるほど、育児不安に陥る可能性を高めてしまうことである。

とりわけ母親となる女性が孤立する可能性が高まることでもある。そして孤立は不安の条件となる。

子どもを持つ家族が多数派であれば、子どもは自ずと多様な人間関係のなかで生まれ、母親も育児のモデルを身近に得ることができる。だが、少数派になれば、いずれの機会も少なくなる。このような変化を考慮せずに母役割を強調すればどうなるか。母子双方の孤立化を助長し、不安感を高める。どこの家にも子どもがいた時代とそうでない時代では、父親や他の家族との関係(役割)が変化することを忘れてはならない。

**親專業になる女性が少数派に**

さらに厳しい条件が重なる。図3(三八頁)を見てほしい。二〇代の合計特殊出生率は大きく低下するが、三〇代前半はほぼ平行、後半はむしろ上昇している。また図4(四〇頁)から、二〇代前半の女性では九割近く、後半でも五割以上が未婚、三〇代に入っても前半では四人に一人が未婚であることがわかる。これは二〇代の女性の場合、母親となることは同世代のなかで少数派になることを意味する。当然、不安感が高まるであろう。

三〇代はどうか。別の問題が出てくる。図5(四一

したがって、現代の親子が置かれた条件の下では、従来の性別役割分業を前提にする限り、問題の解消どころか、それ自身が不安の原因となる。ではどうすればよいか。男女が共に働き、共に育てる社会システムへの改編が根本だが、いまを生きる子どもと親には間に合わない。そこで、いまずく行える処方を二点提示したい。

### 子育ての目的と子どもの位置づけの転換を

仕事を典型とする学校が要求する自己実現の価値のヒエラルキー（自分が努力した結果は自分に返ってくる）のなかに、他者（子どもや夫）の成長（昇進）に自己実現の成果を委ねる生き方は入ってこない。母親像は職業人としての自分と並ぶ選択肢の一つ以上のものではなく、自分の母や親となった先輩の姿から、母として生きるのみでは自己の人生が終わらない現実を知らされる。

男性はどうか。あえて言及することもないであろう。

仕事中心の父親から子育てのノウハウを学ぶことは不可能。息子に向けられる母の愛は、勉強以外のすべてを奪う。親になる前に一人の人間として自立する条件から問い直す必要がある。その迂回なき父親業の強調は、かえって問題を拡大する可能性さえ危惧される。

したがって、現代の親子が置かれた条件の下では、従来の性別役割分業を前提にする限り、問題の解消どころか、それ自身が不安の原因となる。ではどうすればよいか。男女が共に働き、共に育てる社会システムへの改編が根本だが、いまを生きる子どもと親には間に合わない。そこで、いまずく行える処方を二点提示したい。

### 子育ての目的と子どもの位置づけの転換を

仕事を典型とする学校が要求する自己実現の価値のヒエラルキー（自分が努力した結果は自分に返ってくる）のなかに、他者（子どもや夫）の成長（昇進）に自己実現の成果を委ねる生き方は入ってこない。母親像は職業人としての自分と並ぶ選択肢の一つ以上のものではなく、自分の母や親となった先輩の姿から、母として生きるのみでは自己の人生が終わらない現実を知らされる。

男性はどうか。あえて言及することもないであろう。

仕事中心の父親から子育てのノウハウを学ぶことは不可能。息子に向けられる母の愛は、勉強以外のすべてを奪う。親になる前に一人の人間として自立する条件から問い直す必要がある。その迂回なき父親業の強調は、かえって問題を拡大する可能性さえ危惧される。

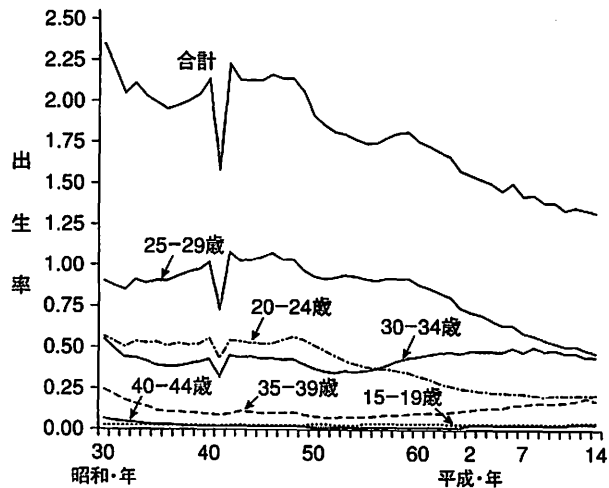


図3 合計特殊出生率の年次推移 (年齢階級別内訳)  
厚生労働省「平成14年人口動態統計月報年計(概数)の概況」より

### 親になる学習の機会が失われる

改めて図4の数値の変化を追ってほしい。二〇代前半では昭和五〇年から五五年の間に差があり、それが五年ごとに次の年代に移っていることが確認されよう。昭和五五年の二〇歳は三五年生まれ。今、四〇代に届こうとする人たちが、現在子育て期にある男女、すなわち本稿が対象とする親の世代である。

じつはこの男女から二人の子どもを専業主婦が育てるといふ家族が日本社会に定着し、二〇歳を過ぎても学校で自己形成をすることが多数派になる。この人たちが工業化(労働集約型)から情報化(知識集約型)に移行した八〇年代日本社会が受け入れた。経済の拡大とサービス化は、男女雇用機会均等法の後押しもあって、多くの女性に仕事の面白さと自由な時間と友人と金銭を得る喜びを味わう職場を用意した。だがそれは、自分が育つ過程で親となる学習をする機会を失ったまま成人せざるをえなくなる最初の世代になることを意味する。

まず女性だが、二人っ子として学校中心に育つ過程では、子育ての喜びと理不尽さの感覚を学習できない。成

その一つは、親の子育ての目的の転換である。キーワードは自立、親の課題は「よく育てる」から「よく離す」ことへの転換。理由は現代社会では親と子が異なる条件のもとで生きることが強制されるからである。重要なのは自立とは孤立ではないこと。他者との関係があった初めて自ら立つ位置を知ることができる。父親の育児参加を説くだけでは、子育ての現状を改善できない。まして三歳児神話では自立を説明できない。子どもの自立の場が家の外にある以上、自立への責任は親のみでは担いきれない。

二つ目の処方として、社会全体の子どもの位置づけの転換がある。かつての日本社会では子どもは「家の子」であった。それが国家の子に拡大され悲劇の淵源となったことを反省し、「私の子」に転換することから戦後の民主化が始まった。それを具体化したのが、専業主婦による二人の子育て。だが、いまその家族が内側から解体されつつある。そこで生まれ育った男女が新たな家族を作ることをためらっているからである。その問題の根が、子どもを産んだ一人の女性に子育ての負担を強いることにあり、そのことが子どもにとっては一人の人間として自立するために必要な知識、技能、態度を獲得するうえ

子育てが不安になる時代背景

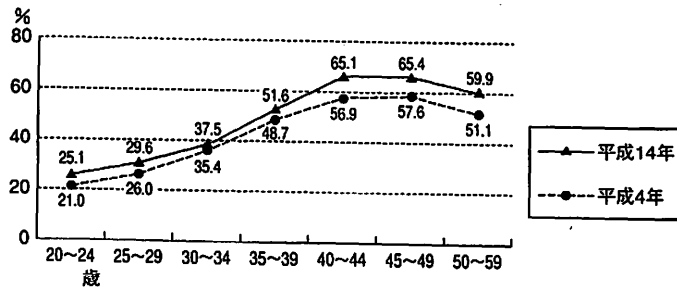


図5 20～59歳の「配偶者あり・同居児あり」女性の「仕事あり」者の割合の年次比較  
厚生労働省「平成14年国民生活基礎調査の概況」より

その方法はさまざまである。税(公助)を中心にするか。個人負担(自助)の割合をどうするか。いたらない部分を互いに支えあう(共助)か。いま、政府や自治体が推進する保育園の増設は公助の典型だが、そこに子どもを通わせる親の負担は自助となる。他方、共助の典型は各地で展開される子育て支援活動。より

で問題があることを確認した。その意味で、子どもを改めて社会全体の中に位置づけ直す必要がある。その方向が「社会の子」である。

専門化されたNPO(非営利組織)も共助の理念の組織化である。改めて強調しておきたい。いま、多くの親は経験不足に加えて、人間関係を培う力が弱く、身近に相談相手を見出すことができず、孤立した子育ての状況にある。それらは育児不安どころか児童虐待の条件ともなる。このような現状が求めるのは、親の力不足や責任を問うことではなく、先輩のアドバイスや子育て仲間の人間関係を豊かにし、親として必要な力を育む機会を身近な生活の場に用意することではない。さらに、このよきな人間関係をより広く地域全体の教育力とするために、地域の人々による積極的な支援の仕組みづくりが必要だ。生活の場を共有する人たちの交わりを基盤に、子育てを支えるヒト、モノ、情報のネットワークを積極的に広げるための行政施策やボランティア活動の重要性が指摘される理由である。

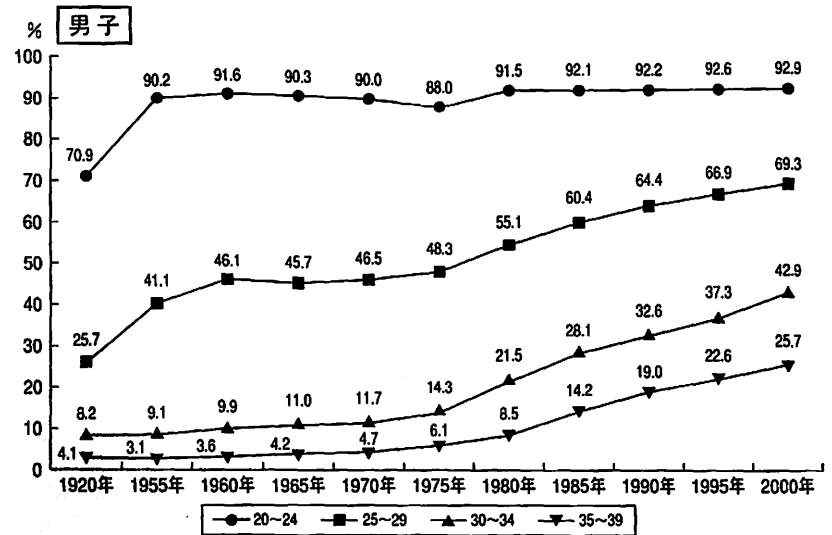
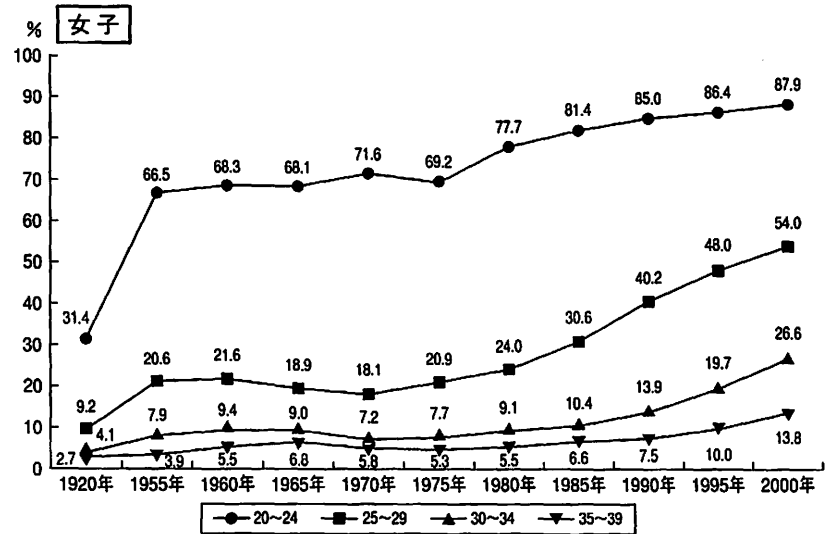


図4 年齢別未婚率の推移  
国立社会保障・人口問題研究所「少子化情報ホームページ」より

# いま、求められる親の条件

- 2 いま、親の条件を考える 平木典子
- 11 大人になれない親の心理 金盛浦子
- 19 子育てを左右する夫婦関係 亀口憲治
- 28 発達によって変わる親のかかわり方 菅野幸恵
- 35 子育てが不安になる時代背景 馬居政幸

## 親子関係改善のポイント

- 42 親子間のコミュニケーションを見直す 向井隆代・蓑輪早織
- 47 親が心配したほうがいいこと・しなくてもいいこと 安島智子
- 52 待てる親・聴ける親になる 荻野ゆう子
- 57 子どもとの距離のとり方——過保護でも放任でもなく 前田研史
- 62 異性の子ども・同性の子ども——親子関係のあり方 石川瞭子
- 67 子どもをダメにすると見なされる親の背景 柴田長生

## 子育て上手な親になる

- 74 上手に子どもを自立させる親——自信を育てる応答テクニック 矢幡 洋
- 80 子どもを無気力にしない親 小玉彰二
- 86 思いやりのある子を育てる親 森田明子

## さまざまな家庭への援助

- 92 一人親や単身赴任の家庭 久芳美恵子
- 96 不登校の子をもつ家庭 濱崎武子
- 100 ADHDの子をもつ家庭 納富恵子
- 107 親の悩み相談・カウンセリングルーム
- 108●子どもをうまく叱れない 北島歩美
- 111●子どもがいじめられているようだ

- 114●部屋に閉じこもってゲームばかりしている 金澤弘明
- 117●子どもが性的な情報を集めている
- 120●夫婦で子育ての考え方がまったく違う 小坂和子
- 123●夫が子育てに参加しない

## 教師は親をどう援助するか

- 126 学校のことを知ってもらう 谷川幸雄
- 129 親との面接のあり方
- 132 授業参観や保護者会での工夫 宇都 修
- 135 子どもの言動に関心をもってもらう
- 138 虐待を繰り返す親の現状とその介入方法 浅井春夫
- 143 虐待を続ける親へのカウンセリング 金井雅子

## 特別論考

- 150 江戸時代の親と子育て 中江和恵

## コラム・現代の親と子育て

- 26●高齢出産と子育て 72●親役割とジェンダー 伊藤一美
- 104●カリスマ主婦 148●親権の剥奪

## 連載 子どもが生きるカウンセリング技法 第25回

- 167 認知療法——環境とのかかわりで認知を修正し、子どもの対処可能性を広げる 松田英子



# いま、 求められる 親の条件

いま、  
親の条件を考える  
平木典子

子育てが不安になる  
時代背景

- 親の悩み相談・カウンセリングルーム
- うまく叱れない
  - 子どもが性的な情報を集めている
  - 夫が子育てに参加しない

教師は親をどう援助できるか

虐待を続ける親へのカウンセリング

「連載」  
子どもが生きるカウンセリング技法 認知療法

## キーワードで学ぶ 特別活動 生徒指導・教育相談

有村 久春・著 (昭和女子大学助教授)

A5判/176頁 本体2,000円+税

三つの教育活動を  
統合的にとらえた基本書!

キーワードで学ぶ  
特別活動 生徒指導・教育相談

有村久春・著



子どもの自己成長にとって重要な、特別活動、生徒指導・教育相談の領域、教育活動から74の最重要語を厳選。事典形式、図解入りでわかりやすく解説。教育実践を発展させるための必読書。

### 主なキーワード

- |            |                |
|------------|----------------|
| ● アサーション   | ● 自己実現         |
| ● いじめ      | ● 思春期          |
| ● ガイダンスの機能 | ● 社会性          |
| ● カウンセリング  | ● スクールカウンセラー   |
| ● 学級活動     | ● 生活指導         |
| ● 学級経営     | ● 適応           |
| ● 学校行事     | ● 人間関係         |
| ● 基本的生活習慣  | ● 発達課題         |
| ● 教育相談     | ● 不登校          |
| ● クラブ活動    | ● ホームルーム活動     |
| ● 子どものサイン  | ● 問題行動/ほか全74項目 |

